

原子力に関する国際会議について

気象学会の原子力国際会議準備委員会では、今年の総会で決定された“原子力に関する国際会議への協力参加”決議にもとずいて、代表派遣、国内準備委員会への参加、調査研究結果の公表などについて準備を進めているが、この機会にこれまでの経過報告をかねて広く皆さんの積極的な御協力と御支援を訴えることとなった。

国連の主催する“原子力の平和利用に関する国際会議”については、8月8日からジュネーブで開かれることになり、その準備が政府の手で進められている。この会議の性格は主として、原子力を新しい動力として平和的に利用するための技術的な面に限られており、日本気象学会では、先の決議にもとずいて、日本における気象関係の調査研究結果が公表されるよう、外務省に申し入れた。その後、不幸にして、日本から出された気象関係の調査研究はすべて、口頭による報告としては採用されないことになった。

水爆実験の気象に及ぼす影響を調査したこれらの論文は、原子力がこうした大量破壊兵器等に使用された効果についての問題であり、これは先に世界科学者連盟会長ジョリオ・キュリーが国連に対し会議の性格を拡大することを要望した提案の内容に含まれていたものである。

世界科学者連盟 (World Federation of Scientific Workers) では、国連で米国の提案が採決された直後、国連主催の国際会議を補うものとして、原子力平和利用の必要性に加えて、原子力がかつ他の一面、すなわち大量破壊兵器として使用する時の諸問題を討論することを含む、“原子力の社会的意義に関する国際会議”を提唱した。この提唱と同じ主旨の手紙が6月に同会議発起人會書記長パーホップ氏から、日本気象学会理事長あてに来ている。準備委員会では、これに対して学会の動きを伝えるとともに、更に会議についての詳細な通知を要求した。

国内では、この会議に対して朝永、坂田、武谷、島、小原、福島、柘植の諸氏によって準備委員会の呼びかけが行なわれ、物理の素粒子論グループでは連絡係をつくった。学会ではこれらの団体と連絡しながら、医学、生物の分野とも連絡をとって広い範囲で準備を進めることとなった。

学会では、この提唱の主旨にもとずいて、1) 論文を提出するため、2) 代表を派遣するため、の準備の仕事を開始している。この活動を進めるための諸経費、代表派遣の場合はその費用について、今後皆さんの協力をお願いすることも考えられるし、またこの会議に提出する報告を作るため、この問題に関連した論文を送って下さるよう切望する。

送り先 東京都杉並区馬橋 気象研究所 伊東 彊 自

締切 9月10日

印刷された論文 別刷2部(邦文、欧文を問わず)別刷のない場合は未印刷論文に準じ、掲載雑誌名巻号を明記のこと。

未印刷の論文 概要(同上)投稿予定の雑誌名、発表の場所日時または予定を明記のこと。

1955年7月27日 日本気象学会 原子力国際会議準備委員会 主査 正野 重方

書 評

Climate and the British Scene

G. Manley 著, London, 1953, p. 314

The English Climate

C. E. D. Brooks 著, London, 1954, p. 214

同じような書物が2冊出たので紹介しておく。どちらも英国の気候を例にとって気候現象をわかりやすく説明したもので、かなり程度は高いが教課書でなく一般向解説書である。気候学を専攻する者としては、このような書物が世に要求される時代になったことを喜びたい。

Manley は有名な気候学者で現在ロンドン大学教授、数年前は英国気象学会長の地位にもあった人である。“気候と英国の風景”は第1版が1952年に出たもので、41枚のカラー写真、40枚の黑白写真、75の図版がある。写真の製版も非常に美しく、写真帳としての価値さえ十分あるように思う。そうかといって大人のための高級な絵本では決してなく、図版には普通の教課書にのっている以上に専門的なものもある。第1章の序章以下14章にわかれ、気候資料の由来、現在の観測について、英国の湿った大気の説明、英国とその付近の大気循環、冬、春から初夏、夏と秋、景観と冬の天候、山岳と湿地、降雪と積雪、英国における気候変化、気候と人類な

どについて述べている。各章の終りには重要な参考書や論文があげてあり、学生の自習用やこの本によって気候に興味をもつ一般人の役に立っている。ことにこの引用論文については英国の学者自身が自国の代表作と考えているものをえらんでいるのだからその点でも面白い。

C. E. D. Brooks については紹介の必要もないだろう。40年にもなる研究生生活を経た昨年、新しい書物を続々と出して老いてますます盛ん之感深からしめている。従って内容に間違いのあるはずもなく、淡々と、最近の成果をよく語り傳えている。序説、風と暖かさ、ストームとスコール、雨・雪・雹霰、霧と煤煙、局地気候、気候と適応、どこに住むべきか、季節、冬・春・夏・秋、天気の変化と前兆、毎日の天気図などの章にわけているが、Manleyの本より以上に一般人向きに書き下してある。しかしテーマに取上げられている部分については相当深くていいに述べており、例えば“霧と煤煙”とか、“局地気候”の章では、新しい教課書としての意味もある。ことに局地気候が、教課書の一章になったのは Landsberg の Physical Climatology (1944) において最初であろうが、一般向きの教養書の一章にもうけられたのは本書が初めてではなからうか。Manley のが応接間で拜聴する解説書なら、Brooks のは縁先で夕涼みでもしながら耳傾ける解説書である。(吉野正敏)